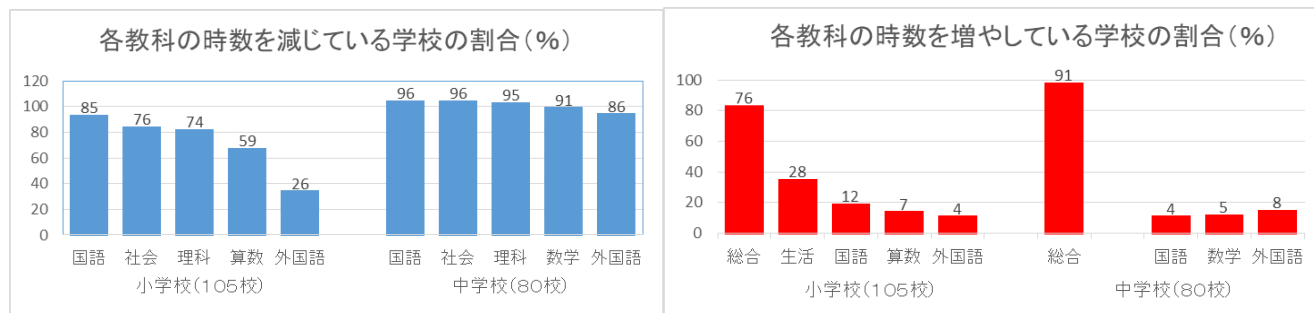


これからの授業②

文部科学省は、学校や地域の実態に応じた、より効果的な教育の実現のため、年間総授業時数は維持しつつ、各教科の時数を1割上限で弾力的に配分できる制度を設け、授業時数特例校としてその状況を把握しようとしています。野洲市は、その指定を希望する学校はありませんが、その状況は知っておいてこしたことはありません。

この制度は、R4 年度に全国小中 28 校からスタートし、R7 年度は、182 校に増えました。（前年度からの継続校は含まない）取り組み状況は以下のようなグラフとなっています。（統計資料は文科省より）

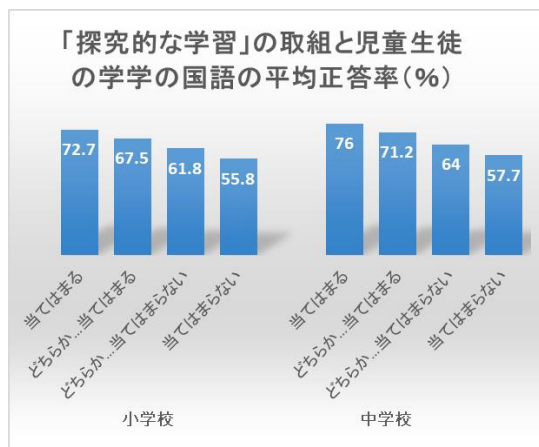


上左のグラフの減じている教科を見た場合、小学校では国語が85%で最も多くなっています。これは、国語の年間時数がどの学年も他教科より多いので、一番減じやすいものだと思います。次に社会と理科が75%前後で、算数が約60%となっています。時数では算数の方が社会・理科より年間時数が多いですが、積み上げや定着の面から算数を減らしている学校は社会・理科を減らしている学校より少ないようです。また5番目となっている外国語は、ALTの関係もあり減らすことはさらに難しいように思われます。

中学校では、小学校ほど国語の時数が他教科より多くないこともあり、年間時数が多い国語・社会・理科が約95%と同じぐらいで、その後、数学、外国語がわずかの差で続きます。

では、各教科から減らした時数は、何に使われているのか上右のグラフを見ていきましょう。小学校では76%、中学校では91%が総合的な学習の時間となっています。これは、探究的な学習を進めるには、小中共に学校で週2時間（中1では1.4時間強）では、十分でないということです。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のサイクルを2度3度と回していき、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことにつなげるために、時数を増やしていくことを選択している学校が多いということです。小学校の低学年では、総合につながっていく生活科が多いのもそのためです。

また、総合的な学習で身につく学び方は、他の学習にも関連していることが分かっています。



左図は、総合的な学習の時間で、自ら課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表する学習に取り組んでいるかを4段階で回答したものと学級の国語の正答率を各項目で示したものです。

小中学校とも、探究の学習に取り組んでいると答えた児童生徒が、学級の平均点が高く、探究の学習をやっていないと感じていた児童生徒ほど正答率が低い傾向が見られます。これは、中学校ほど正答率との関係が強くなっており、算数・数学でも同じ傾向となっています。

卵が先か鶏が先かという論争は聞かれそうですが、探究学習に取り組んでいると思っている児童生徒ほど学級の正答率が高いのは事実です。

だからこそ、特例校に名乗りを上げた学校では、「総合的な学習の時間」の授業時数を増やし、単なる調べ学習の発表や時数の消化とも感じられる授業になることなく、探究のサイクルを複数回行い、授業時数を確保することで、総合での付けたい力と他教科の学力も高めていこうとしているのです。

なお、文科省は、次期学習指導要領から学校の裁量で各教科最大 15%ほどのコマ数（週最大 4 コマ）を減らし、調整できるようにするという方針を 8 月にまとめました。生み出した時間は、他教科に上乘せしたり、学校独自の教科を新設したりすることも可能ということです。また、「裁量的な時間」として学習枠（個別最適な時間や読解力向上）や研究研修枠（教員の授業研究）に活用したりもできます。ただし、「裁量的な時間」は週 2 コマが上限で、研究研修枠はこのうちの週 1 コマまでととしています。はたして、これが「カリキュラム・オーバーロード」解消につながるのでしょうか。

まなび野洲チャレンジ！ 48

今回はこの問題です。正しい答えの番号はどれでしょう。
答えは、最下段に載せています。

三上山は人々の心を捉え、数多くの散文が読まれてきました。
次の俳句は、誰が詠んだものでしょうか。

ひらみかみ
「比良三上 雪さしわたせ 鷺の橋」



《矢橋帰帆島越しに見える三上山》
（滋賀県立近代美術館蔵）

①松尾芭蕉

②北村季吟

③与謝蕪村

④小林一茶

おすすめの図書



『「教師力を上げる」ための成功法則』

大前 暁政 著

発行元 明治図書出版

教師力向上のための原理原則を身に付ける！

こちらの書籍は、教師力を上げるための具体的な方法を紹介しながら、教師力向上の具体的な道筋を示した内容になります。

著者が新卒時代、現場でよく言われた言葉があります。

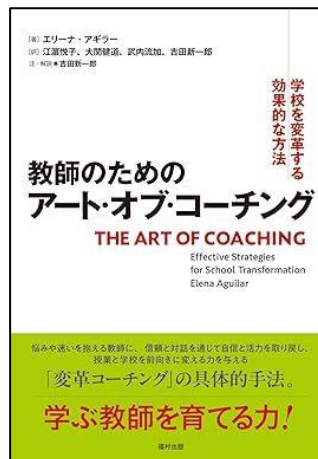
「新卒教師は、ペーパードライバー以下」

授業にしても、学級経営、子ども対応、校務分掌、保護者対応、地域との連携、学校教育のマネジメントなど、どれを行うにしても、それを実行する力が未熟なまま教壇に立つことになる状況を揶揄した言葉です。

では、そのペーパードライバー以下の新卒教師が、数年でプロとしての力を身につけるにはどうしたらいいのでしょうか？

それには、以下の内容を理解する必要があります。

1. 教師力の中身（内容）
2. 力を向上させるための努力の道筋（やり方）



『教師のためのアート・オブ・コーチング』

エリナ・アギラ 著

江濱悦子 翻訳

発行元 福村出版

「あなたはどのような教師でありたいですか？」

学校で起こる出来事に、何か違うな、何かおかしいな、と、モヤモヤを感じながらも、日々の多忙感から、その違和感に蓋をする瞬間、あなたにはありませんか？もがけばもがくほど、結局、自分の無力さに打ちひしがれます。

この本を読み進め、「コーチング」について理解すればするほど、いくつかの不思議な現象が身の回りで起きてきます。まず、自分が出来ることを出来る範囲でやってみよう、というエネルギーが自分自身の中から湧いてきます。実際に自分が出来ることを出来る範囲で、落ち着いてやっていると、それに賛同して一緒に手伝ってくれる同志の存在に気付きます。同志が増えれば増えるほど、少しずつ学校全体の風土が変わってきます。そうすると、モヤモヤを感じる瞬間が、いつの間にか減っています。